

# 正覚坊

豊島与志雄

青空文庫



正覚坊しょうかくぼうというのは、海にいる大きな亀かめのことです。地引じびきあ

網みを引く時に、どうかするとこの亀が網にはいつてくること  
があります。すると漁夫りょうし達は、それを正覚坊がかかったと言つて  
大騒ぎをします。正覚坊が網にかかるときつと大漁がある、と言  
われているのです。漁夫達は皆集まつて正覚坊をとり巻き、近所  
の家から酒をたくさん取り寄せて、それを正覚坊に飲ませます。  
正覚坊は酒が好きです。頭が赤くなるほど酒のごちそうになつて、  
それから海に放されます。うれしそうに頭を打ち振りながら、波  
の上を沖の方へ泳いで行きます。漁夫達はその姿を見送つて、残  
りの酒を皆で飲みながら、大漁節というおもしろい歌を歌つたり

なんかして、次の大漁を祝います。

そういう正覚坊について、おもしろい話があります。

ある海岸の漁夫村に、平助へいすけという一人者の漁夫がありました。

昔は沖遠くまで漁に出たりなんかして、強いたくましい若者でしたが、家族の者はみんな死んでしまい、ひとりつきりで年は取りますし、後には、岸辺きしべの小魚や川の魚などを取って、その日その日を送っていました。そしてこの平助は、酒が大変好きでした。

いくら飲んでも酔ったことがありませんでした。あまり飲むと身体からだにさわるよと人に言われても、彼は平気でした。酔うから身体にさわるので、俺おれのように酔ったためしのない者はいくら飲んでだいじょうぶも大丈夫だ、と彼はいつも言っていました。始しじゅう終貧乏をしな

がら、少しお金があると酒ばかり飲んでいました。村の人達は彼のことを、しょうかくぼう正覚坊だとあだなしていました。

ひどい暴風雨あらしの晩でした。平助はいつものように徳利とくりを前にすえて、ひとりつまらなそうに酒を飲んでいました。すると、表の戸をことりことり叩くものがあります。初めは風の音かと思っていきましたが、それが何度も続くものですから、平助も少し気になりました。彼は杯さかずきを前に置いて、表の方をふり返りながらたずねました。

「誰だい？」

何の返事ありませんでした。耳をすますと、風と雨との音に交まじって、やはりことりことりと戸を叩いています。

「何か用事かね」と平助はまたたずねました。

それでも返事がありませんでした。しまいに平助は、仕方なしに立ち上がって、表の戸を開いてみました。さつと風と雨とが吹き込んで来たかと思うまに、闇の中から、まつ黒な大きなもののそりのそりとはい込んできました。平助は腰こしをぬかさんばかりに驚きました。よく見ると、それは畳たたみ半分ほどもある大きな正覚坊でした。

正覚坊だとわかると、平助は初めてあんどしました。いきなり表の戸をしめて、正覚坊を部屋の中に連れて来ました。正覚坊はそこにぐったりとなつて、喉のどもと二元をふくらましながら、はあはあと息をきらしてゐるらしいのです。

「おい、どうしたんだい」と平助はたずねました。

しょうかくぼう

正覚坊はじつとしています。いくらたずねても黙つていま

す。それもそのはずです、亀かめに口がきけるわけはありません。平助はそれに気付いて、ひとりで声高く笑い出しました。そしてそれはきつと沖の方から暴風雨あらしに吹きつけられて来たのだろう、と考えました。それで、元気をつけてやるために、徳利とくりの酒を茶碗についで差し出しました。すると、正覚坊はその中に首をつき込んで、きゆうつと一息ひといきに飲み干しました。平助はうれしくなりました。縁起えんぎがいいと言われている正覚坊が、向こうから訪ねて来てくれたんですもの、漁夫りようしとしてこれくらい愉快ゆかいなことはありません。平助はすぐに、ありったけのお金で、酒をたくさん買っ

て来ました。そして二人で飲み始めました。正覚坊もだんだん元気になってきまして、しまいには酔っぱらって部屋の中をおかしな格好ではい廻ります。亀踊りをやってるのでしよう。平助も酔っぱらって首や足を振り動かしてる正覚坊にちようしを合わして、歌を歌ったり手拍子てびようしをとったりしました。

そのうちに、酒はなくなりすし、夜はだんだんふけてきますので、とうとう、平助はそこに倒れたまま眠つてしまいました。

朝になってふと眼を覚ますと、平助はちゃんと布団ふとんを着て寝ているのでした。見ると、正覚坊も同じ布団の中に、ぐうぐう眠っていました。平助が起き上がると、正覚坊も起き上がって、きよとんとした眼をしています。暴風雨あらしはもう静まっていました。



平助は正覚坊の背中を撫なでながら、さてその始末しまつに困りました。家に置いておけば、自分が漁りように出た不在るす中に、村のいたずら小僧こそうどもからどんな目にあわされるかわかりません。まさか床の下やおおしい押し入れに一日隠しとくわけにもゆきませんし、また、始終しじゆう連れて歩くわけにもまいりません。それかつて、このまま海へ逃がしてしまうのも、何だか心残りです。

平助はいろいろ考えていましたが、ふと名案めいあんが浮かんできました。村の側を流れてる川が海に注そそごうという川口のそばに、大きな入江いりえがありまして、深い深い沼を作っていました。平助はそこに正覚坊しょうかくぼうを入れてやろうと考えました。川口から海へ逃げに行けば仕方しかたないけれど、こういうおとなしい正覚坊だから、あ

るいは沼の中にいて時々遊びに来てくれかも知れない。

「お前をよい所に住ましてやるぞ」と平助は言つてきかせました。　「深い広い沼だから安心だ。海に出るとまた暴風雨あらしにあうから、おとなしく沼の中に住んでいろよ。そして時々遊びに來いよ。酒を用意しておいてやるぞ」

正覚坊はその言葉がわかつたかのように、頭をこくりこくりやつてみせました。

平助は人に見つからないようにして、正覚坊をつれて沼へやつて來ました。正覚坊は一つお辞儀じぎみたいなことをして、沼の底へ沈んでゆきました。

平助はうれしくつてたまらないような気がしてきました。元氣

いっばいで漁に出ました。大層たいそうよく魚が取れました。晩になると、魚を売ったお金で酒を求めて、正覚坊が来るかも知れないと待ってみました。

晩遅くなつてから、戸をことりこりと叩くものがあります。平助は半信半疑はんしんはんぎで戸を開いてやりますと、正覚坊がちゃんと来ているではありませんか。平助の喜び方つたらありませんでした。夜ふけるまで二人で酒を飲んで、それから一緒に寝ました。朝になると、正覚坊は沼へ帰ってゆきました。

それからは、每晚平助の家へ正覚坊が遊びに来ました。二人で楽しく酒を飲みました。

ところが、元来がんらい正覚坊しょうかくぼうとあだなされてるくらいの平助と、

本物の正覚坊とが一緒になつたものですから、いくら酒があつてもすぐになくなつてしまいます。平助は無欲ですから、お金をためようなどとは思いませんでしたけれど、正覚坊と二人で充分に酒を飲めないのが残念でした。ことに漁りようが少ない時なんかは、少しばかりの酒を前にして、しおれ返つてしまいました。

平助が困つたように考え込んでるのを見て、ある晩、正覚坊は何と思つてか、そこにあつた投網とあみをしきりに引つ張ります。それを見て平助は、これは投網を打ちに行けというんだなと悟さとりました。

平助は正覚坊を連れて、投網で夜漁やりように出かけました。すると何しろ正覚坊が魚を追い廻して来てくれますので、そのの所へ投

網を打つと、はいることはいること、またたくまに持ちきれないほど取れました。

そういうふうにして、平助と正覚坊とは、充分に酒を飲むことが出来ました。一晚漁に行けば、二三日分の酒さかだい代だいはわけなく稼かせげるのでした。

けれども、あまり酒を飲んだのがいけなかつたのです。翌朝まで正覚坊は酔っぱらって、沼の底へもぐるのも忘れて、岸で昼寝をすることがいくどもありました。それを村の人達に見られたのです。

沼のほとりで大きな正覚坊が眠つてるのを見たとき、一人の者が言い出しました。すると、俺おれも見た俺も見たと、いくにんも見た

人が出て来ました。それならばひとつ生捕りにしてやろう、ということになりました。縁起がいい奴だから村中で池の中に飼つてやろう、という相談がまとまりました。

それを聞いて、平助は心配しました。池の中に飼われると、一緒に酒を飲むことも出来なくなるわけです。その上、平助は若い時荒海あろうみの上を乗り廻したことがあるだけに、正覚坊がもし狭苦しい池の中に飼われたら、さぞつらい思いをするだろうと考えました。どうしても正覚坊しょうかくぼうを村の人に生捕らせてはいけません、しかし、どうもうまい方法が見当りませんでした。

そうこうするうちに、いよいよ明日は村中で沼に網を入れるという、その前夜になりました。平助は仕方なしに、村の人達をだ

ましてやろうと考えました。そして、正覚坊へはよく言つてきかして、その晩二人で大きな石を沼の中に沈め、正覚坊は沼の岸きしべの真菰まこもの中に隠れました。

翌日になると、村の漁夫りようしたち達は朝早く集まつて、沼へ大きな網を入れました。大変重たいものがかかりました。そら正覚坊がかかったと言つて、総そうが掛りかりで、引き上げてみますと、大きな石ではありませんか。皆はがっかりしました。平助一人が心で喜びました。

ところが漁夫達の中に一人の物識ものしりがいまして、そういう沼に住むくらの正覚坊だから、きつと石に化ばけたのに違ちがいない、と言いい出いしました。人々もなるほど考えました。

そこで、その石を正覚坊になすのが問題となりました。酒をぶつかけたらいいかも知れない、と一人の男が言い出しました。早速つそく酒を取り寄せて、石にぶっかけてみました。けれども、元もと々とからの石ですから、酒をかけたくらいで正覚坊になりようわけはありません。

「なかなかしぶとい奴だやつ」とも一人の男が言いました。「この上は行ぎようじや者に祈つてもらおう」

一同はそれに賛成しました。幸いとその村の近くの町に、狐きつねつきを落としたりなんかする行者がいました。それがすぐに呼ばれてやって参まいりました。

村中はお祭りのような騒ぎでした。御幣ごへいをこしらえるやら、色



々な品物を供<sup>そな</sup>えるやらして、いざ御<sup>ご</sup>祈<sup>ぎ</sup>禱<sup>とう</sup>となると、村中の人<sup>びと</sup>が男も女も子供も集ま<sup>あ</sup>つて来<sup>き</sup>ました。行者はま<sup>ま</sup>つ白<sup>しろ</sup>な着<sup>き</sup>物<sup>ぶつ</sup>をつけて、御幣<sup>ごひ</sup>を打<sup>う</sup>ち振<sup>り</sup>打<sup>ち</sup>振<sup>り</sup>、魔法<sup>まほう</sup>めいた文<sup>ぶん</sup>句<sup>く</sup>を口<sup>くち</sup>の中<sup>なか</sup>で唱<sup>な</sup>えながら、しかつめらしく御<sup>ご</sup>祈<sup>ぎ</sup>禱<sup>とう</sup>を始<sup>は</sup>めました。けれども、石<sup>いし</sup>は何<sup>なに</sup>としても石<sup>いし</sup>です。正<sup>しょう</sup>覚<sup>かく</sup>坊<sup>ぼう</sup>にな<sup>な</sup>りつこはありませ<sup>せ</sup>ん。

そのうち<sup>うち</sup>に、額<sup>ひたい</sup>から汗<sup>あせ</sup>を流<sup>なが</sup>して一<sup>いっ</sup>生<sup>せい</sup>懸<sup>けん</sup>命<sup>めい</sup>に祈<sup>いの</sup>つていた行<sup>ぎやう</sup>者<sup>じゃ</sup>は、はたと祈<sup>いの</sup>りをやめて言<sup>い</sup>いました。

「皆<sup>みな</sup>さん、これは正<sup>しょう</sup>覚<sup>かく</sup>坊<sup>ぼう</sup>が化<sup>ま</sup>けた<sup>ば</sup>た<sup>た</sup>のではありませ<sup>せ</sup>ん。元<sup>もと</sup>々<sup>もと</sup>から  
の石<sup>いし</sup>です」

村<sup>むら</sup>の人<sup>びと</sup>達<sup>たち</sup>はあ<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>けにとら<sup>ら</sup>れて言<sup>い</sup>葉<sup>は</sup>もあ<sup>あ</sup>りませ<sup>せ</sup>んでした。や<sup>や</sup>が<sup>が</sup>てその気<sup>き</sup>持<sup>もち</sup>ちが静<sup>しず</sup>まると、正<sup>しょう</sup>覚<sup>かく</sup>坊<sup>ぼう</sup>に對<sup>たい</sup>して腹<sup>はら</sup>が立<sup>た</sup>つてき<sup>き</sup>ました。こ

の上はぜひと本物の正覚坊を生捕いけどつて、仕返しかえしをしてやらなければならぬ、と口々に言い立てました。正覚坊が化けた石だとなんか、誰かがよけいなことを言ったのなんかは、もう忘れられてしまつていました。

けれども、その日はもう夕方になりましたから、翌日沼狩ぬまかりをすることにして、一同は罵ののり立てながら引き上げました。

それらのことを、平助は始しじゅう終胸をどきつかせて眺めていました。晩になると、困ったことになったと思案しあんにくれました。実はこうこうだと今更いまさら言い出したところで、村中の人の気が立つて折りですから、それこそ、正覚坊ばかりではなく、平助までひどい目に逢わされるに違いありません。こうなった上は、夜のう

ちに正覚坊を逃がしてやるより外仕方しかたないのです。

平助は死ぬような思いで、きつと決心をいたしました。酒をたくさん買っておいて、正覚坊が来るのを待っていました。正覚坊は平気な顔をして、いつもの通りやって来ました。

二人は酒を飲み始めました。しかし平助は気がめいりこんでしまいました。終ついには涙をぼろぼろ流して、正覚坊の頭を撫なでながら、よく訳を言つてきかせました。

「そういう訳だから、もうお前とは別れなければならぬ。名残なご惜りしいけれど仕方しかたがない。沖に出たら、暴風雨あらしやなんかに気をつけて、身体からだを大事にするがよい。亀は万年も生きると言つてあるから、お前も長く生きて、時々俺の事を思い出してくれよ」

しょうかくぼう

正覚坊も、平助の言葉がわかつたかのようにうなだれてしまいました。涙をこぼすまいとつとめているように眼を瞬しばたきました。

そして、酒もなくなり、夜明けもまぢかになつた頃、平助は正覚坊を連れて海に出ました。西の方の空に三日月が掛かかつていて、海おもての面がぼーと明るくなつていました。

「それじゃこれで別れるから、達たつしや者に暮らせよ」

そう言つて平助は、正覚坊の頭を撫なでながら、沖の方へ放してやりました。正覚坊は何度もお辞儀じぎをして、後ろをふり返りふり返り泳いで行きました。その姿が波の向こうに見えなくなつてからも、平助はぼんやりそこに立っていました。

やがて、早くも夜が明け放はなれて、村の人達は沼狩ぬまがりを始めました。しかしもう正覚坊がいなくなった後のことです。いくら狩り立てても取れません。一同は諦めて帰って行きました。

それからというものは、平助はまるで気抜けのようになりました。そして、毎日沼のほとりに出ては、かの大石を正覚坊の姿に刻きざみ始めました。平助が正覚坊に憑つかれたという噂うわさがぱっと村中に広がりました。しかし平助は、実は真面目で一生懸命だったのです。

正覚坊の像がいよいよでき上がった夕方、平助は村の網あみ元もとの家へ行つて、その御隠居ごいんきよに、一部始し終ゆうのことをうち明けました。御隠居はびっくりしました。なおその上びっくりしたこと

には、翌朝平助は死体となつて沼に浮かんでいました。酒に酔つたあまり溺れ死んだのか、あるいは身を投げて死んだものか、誰にもわかりませんでした。けれども、その前の晩、正覚坊の像にもたれてしくしく泣いていた平助の姿を、月の光りで見たという者がありました。

村の人達は、網あみもと二元の御隠居ごいんきよから平助の話をきかせられて、大変気の毒がりました。そして、平助の死体を沼の岸に埋めてやり、その上に正覚坊の石像をのせて祭りました。

今では、その沼を正覚坊沼と言つていまして、平助が刻きざんだという正覚坊の石像も残つています。沼の魚はみんなその石像に供そなえたものとして、誰も取らないことになっています。海で大漁が

ありますと、村の人達はそこに集まって大漁祝いをいたします。





# 青空文庫情報

底本：「豊島与志雄童話集」海鳥社

1990（平成2）年11月27日第1刷発行

入力：kompass

校正：門田裕志、小林繁雄

2006年4月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 正覚坊

豊島与志雄

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>